

自己主張について

—— 日本と韓国の大学生を対象に ——

禹 鍾 泰

A Comparative Study on Self-Assertiveness

Woo Jongtae

I. 問 題

1. 自己主張とは

自己主張（自己表現）については、日常の生活の中でどれだけ自分を表現しているかという行動的な側面から様々な研究が行なわれている。また、同調性・薬物使用・Submissiveness等との関わりを中心とした研究も多く、その中での自己主張という概念の位置づけが試みられてきた。これらの研究は、“他人の権利を侵害することなく、他人の権利をも尊重した上で、自分の考えや感情を表すことが自己主張である”（Alberti, 1977）という考え方に基づくものである。一方、Horney（『ホーナイ全集』, 1981）は“自己主張とは、自分や自分の権利を主張する行為であり、必要以上に他人に押しつける意味ではない。”という。このように自己主張とは、対人関係において自分の存在を外部に積極的に表す行為であるが、それによって起こり得る相手の感情や気持ちへの影響については検討の余地があるように思われる。

一方、神経症の人間における自己主張の意味についても色々の研究がなされている。中でもHorneyは、神経症の特徴の一つとしての自己主張の非合理性について言及し、神経症の人間の場合、広範囲にわたる自己主張（自己表現）の抑制が見られるという。従って、自由な行動がとれず、外部からの攻撃に対する自己防衛が不能となり自分の立場を守ることができないとしている。このような自己主張能力の欠陥により無力感や無防備感が生じ、その代償として生じる権力への衝動を神経症の人間におけるもうひとつの特徴としてあげている。またHorneyは、建設的な自己主張を、Freudの破壊本能による攻撃的で批判的な敵意のある態度と区別することが大事であるといっている。一方、Adlerも神経症の人間の特徴として、権力への衝動を基盤とした自己主張の存在を指摘している。この架空の重要さ（Fictitious Importance）を目的とした非合理的な自己主張は、Horneyの指摘した“自己主張の欠如→無力感→権力への衝動”という図式と一致している。以上のように、権力への要求・無力感の防備等による破壊的で攻撃的な態度から、健全な自己主張を区別して考えることが大事である。自己主張とは、相手の権利を侵害

することのない非敵対的な方法で自分の考えや感情を表し、自分の権利を主張する行動として考えられなければならない。

次に、自己主張と他の人格側面との関係に関する幾つかの研究を調べることによって、人格全般における自己主張の意味を考えることにする。まず、Williamsら（1979）は自己主張と、他人の存在や外部からの圧力に従ってしまう同調性との間に負の相関関係が存在することを明らかにした。また、彼ら（1981）は、麻薬やアルコール依存症の人々を対象に、薬物使用・自己主張・同調性との関係について研究を行ない、強い薬物を使用している方から、強い自己主張と弱い同調性の傾向を見いだした。H. D'Amicoら（1975）は、薬物使用を中止した方が、使用者や未経験者より自己主張の傾向が高いという結果を発表している。また、J. D. Martinら（1979）の研究では、同調性と自我の強さとの間で負の相関があり、SubmissivenessとSelf-Esteemも負の相関関係にあるという結果を得ている。これらの一連の研究の結果から考えられることは、自己主張は自分の考えや信念に基づくものであり、周りの圧力に対抗できる強い自我を背景にしたものであるといえよう。

以上で見てきたように、自己主張とは、自分の立場を守り、外からの不公平な扱いや敵対的な攻撃から自分を防衛するため、自分の考えや感情を表す行為であるといえる。しかし、自己主張がより効率よくその役割を果たすためには、相手への影響をも考えなければならない。即ち、自分を表現（或いは主張）するにおいて相手の権利や立場を侵害しない形の、権力指向でない、非敵対的な表現である。

2. 自己主張における文化の意味

以上で述べてきた自己主張に対する考え方は、西洋文化を背景にしたものである。日本や韓国のような東洋文化の中では、必ずしもそのまま適用することはできないような印象を受ける。例えば、自分の立場や権利を守るために行なわれるとされる自己主張の在り方は、河合（1976）のいう母性社会では違う様子を見せると思われる。即ち、個人の個性・能力に関わらずすべてのものに絶対的平等性を与える母性社会に対し、個人の個性や能力によって分類され、善と悪の区別をはっきりと付けてしまう父性社会では、強い自己主張が必要とされることは当然のことのような気がする。中根（1972）の、実力と契約の社会の西洋に比べ、東洋では情緒が支配するという指摘も、同じ脈絡で考えられる。

こういう自己主張における文化の影響に着目した研究も幾つか成されている。M. A. Fukuyamaら（1983）は、一連の研究を通じて白人のアメリカ人に比べ、東洋系のアメリカ人は自己主張に困難を有するという結論に達している。また、Galassi（1979）らも、アメリカに住むアジア系の大学生と白人の大学生を対象に自己主張に関する比較研究を行ない、白人の方がより高い自己主張の傾向を示すという結果を得ている。そして彼らは、アジア系の人の場合には、家族や社会的な対人関係においてハーモニーを最大の価値としており、こういった両集団における違う行動規範の存在がその原因であると指摘している。そして、D. Sueら（1983）も、白人とアジア系のアメリカ人を対象に自己主張の研究を行なった。その結果、すべての場面において両集団の間には有意な差は認められなかったが、権威のある人物に対しては、アジア系の集団の方が自己主張することに困難を示すという結果に達している。

以上で見てきたように、西洋の文化（ここでは、アメリカ社会に限定されるが）では、自分の考えや感情を表現できるということが非常に意味をもつことであるように思われる。即ち、自己主張ができることによって、自己充足感や Self-Esteem を高め、対人関係における平衡を保つことができるなど、自分の存在を誇示し自分の権利を守ることにつながるであろう。一方、東洋の文化では、家族から社会に至るまで、個人が属している集団のなかでの対人関係を円満に維持させ、その場（集団）の平衡状態・調和を保つことが、非常に大事な価値とされるため、強く自己主張をすることに抵抗を感じているように思われる。勿論、西洋文化でも円満な対人関係を保つことは大事な価値ではあるが、個人の存在の方により大きい価値が与えられるであろう。ある意味では、東洋の社会ではあまりにも強く自分を主張主張することは相手の気持ちや存在さえも脅かすことであり、その結果として相手との関係に損傷を来し、集団の中における不適応として考えられることかもしれない。即ち、自己主張は、東洋文化と西洋文化とにおいてその役割が違うのである。言い換えれば、西洋の場合は、自己主張は、自分の権利を守り目標を達成する手段として考えられる。その反面、東洋の場合は、自己主張をすること自体が、相手の気持ちや存在さえも脅かすものであるため、自己主張をすることによって得るものより失うものの方が大きいといえるかもしれない。

こういうふうに考えてみると、次のような疑問が生じる。母性社会に住む人々は、いかに自分の考えていることや感じていることを相手に伝え、自分の目標とするものを得ることができるのであろうか。この点について中根（1972）は、日本や東南アジアの場合、人々が口でいっていることと実際意味していることとは、必ずしも一致しているとはいえず、その真意を把握することが非常に重要であるといっている。即ち、日本や東洋の社会では、相手の気持ちを傷つけるかもしれないという危険を冒してまで自己主張をしなくても、相手の方が自分の言いたいことや真意をわかってくれるだろうという期待が前提となっている。このように考えてみると、東洋人の場合は自己主張に困難を有するという言い方以外に、あえて自己主張をする必要性がないという言い方さえも成り立つであろう。

3. 日本と韓国における自己主張

以上、自己主張における文化的要因を西洋と東洋の文化によって比較的な観点から考えてみた。それでは、同じ東洋の文化圏に属しながら同じ文化的背景を有する日本と韓国との間では、自己主張における要因としてどのようなことが考えられるのであろうか。両国の間では、文化的な面で色々の相違点や共通点が考えられるであろう。その共通点や相違点は様々な表現で表すことができると思うし、中には非常に類似した内容のものも存在し得ると思う。次では、その一つ一つについて、両国の場合を比較しながら考えてみることにしたい。

まず、共通点としてあげられる一つの表現は、M. A. Fukuyama のような「調和」（ハーモニー）を大事にする人間関係であろう。これは、河合のいう「母性原理」や「場の倫理」と同じ内容のものである。韓国の人間関係も調和を大事にするということは、M. A. Fukuyama, Galassi, D. Sue らによる一連の研究からも明らかにされたことである。即ち、韓国も、ある個人が他人との関係を成立させるためには契約に頼らざるをえない契約社会というよりは、言語的表現以前に相手の気持ちや考えを読み取ることが大事だという「察しのよい」関係が要求される

社会であるといえよう。このことについては、李御寧（『縮み指向の日本人』）も次のように指摘する。“日本の文化は「和」の文化である。日本の伝統文学の連歌は、人が与えたものを基盤にして自分のものを創造する和の文学であり、日本の茶道も主と客が同じ場所に集まりその内面意識が一体化する和の世界として理解できる。一方、韓国の場合は日本ほど和を大事にしているとはいえない傾向がある。”これは、日本と韓国の微妙な差異を適切に指摘したように思われる。しかし、彼の指摘は、日本と韓国のみを比較する場合のことであって、決して韓国人が他人との関わりを大事にしていないという意味ではない。実際、“韓国では自と他の区別がない対人関係が美德として考えられている（『金容雲、日本人と韓国人』）”という指摘があるくらい、韓国の文化も個人の個性よりは集団の調和が強調されるものである。以上のことを考えると、日本も韓国も集団の中の調和を保つ対人関係が要求されるので、集団の中で個人的な気持ちや考えを表すことは、大変勇気のいることであり、人間関係をも害しかねないことである。

この調和という表現以外に、中根のいう「情緒が支配する人間関係」でも、同じことがいえるかも知れない。日本や東南アジアの情緒の支配する人間関係では「義理」や「恩」が大事にされる関係であり、その基底には常に相手に対する期待が存在している。そして、相手からのリターンが期待できる限り、自分から相手に何かを要求する必要はなくなるのである。韓国の場合も、対人関係において理性よりは情緒が重要視されており、それを「人情」の支配する人間関係（金容雲）であるともいっている。こういう情緒的な対人関係を大事にする社会では、自分の気持ちや考えを言語的に表現しなくても解ってもらうことが期待できるので、西洋社会ほど自己主張に頼らなくてもいいといえよう。

一方、R. Benedict（『菊と刀』）は、日本人におけるコミュニケーションの特徴を「恥」という概念で説明している。即ち、日本人は自分の考えや感情よりも他人の存在や判断などを気にするため、自己主張に困難を感じることになる。この「恥」という特徴は、日本のみならず、韓国の場合でも見ることができる。例えば、韓国語のなかでも日本語の「恥」や「恥じらう」に当てはまる「ヌズボハダ」という言葉がある。この言葉は、韓国の文学作品の中でもよく見かけるもので、人の目を意識して恥じらう姿を描いた美しい表現であると考えられている。日本と韓国では、他人の存在を意識して自分の行動や言語的表現を抑制してしまうことが、必ずしも未熟であるとはいえず、ある意味では、美しい美德として考えられているようにも思われる。

今まで、東洋（特に日本と韓国）における文化的特徴の中で、なんらかの形で自己主張に影響を及ぼすと思われる側面についてみてきた。そのほとんどが、日本の特徴として指摘されたものである。しかし、このら側面は、西洋と日本とを比較した場合には、日本の特徴であると指摘することができても、同じ東洋文化の背景をもつ韓国とを比較した場合には、必ずしも正しい指摘とはいえない。韓国の方が、もう少し自己主張をする傾向があるといった微妙な相違には注意しなければならないと思うが、そのほとんどの側面で、両国は非常に類似した傾向を見せるであろう。

4. 日本と韓国の自己主張における対象の意味

自己主張は対象によってもその在り方が異なると思われるので、次に、日本と韓国において、対象別の自己主張の在り方に影響を及ぼすと思われる側面について考えてみることにする。

前述のように、東洋の社会は集団の中での調和が特に強調される。河合の「場の倫理」以外にも、中根は、“日本では集団の凝集性・孤立性が高く、個人の集団への順応性が高い”と指摘し、“集団の中の間人間関係を支配するのは、「義理」や「恩」である”ともいう。中根や Benedict 等が指摘するように、日本の集団主義は社会集団の中で特に強調されるような印象を受ける。一方、金（『日本人と韓国人』）ほか多くの指摘通り、韓国でも集団意識・共同体意識が非常に強調されていることは明らかなことである。

しかし、ここで興味深いのは、同じく集団中心主義の傾向を有する日本と韓国との間でも、どの集団が優先されるのかは必ずしも一致するようではないことである。R. Benedict は、“儒教の伝統を有する他の社会同様、日本でも家族の意味は大きく、また、孝が非常に大事な道徳律である”といいながらも、一方では、“伝統的に日本人の服従の対象は家族や親類ではなく、集団の指導者であった”といい、家族に比べ社会集団の意味が相対的に強調されることを指摘している。これについては、作田（『恥の文化再考』）も“日本は家族主義であるが、日本の家族は外部からの非難や攻撃に対してその成員を保護する機能が弱い”と、同じ見解を示している。これに比べ、韓国の集団の在り方は、日本のそれとは随分異なるようで、幾つかの指摘がなされている。金（『日本人と韓国人』）は、韓国人の集団意識は家族・家門でその頂点に達すると指摘している。また、ユン（『韓国人』、1970）は、伝統的な韓国の社会倫理を儒教による「家族倫理」と規定し、韓国人において国家や他の共同体は家族の副次的存在であると指摘する。これらの指摘からも解るように、同じ集団中心主義が強調される日本と韓国といっても、日本では社会的集団が、そして韓国では家族が他の集団に比べ優位に存在するという特徴を有する。

日本と韓国における対人関係の特徴を考える際、各集団の意味の外に、欠かすことのできないことは、いわゆる「目上の人」に対する権威の存在である。中根や R. Benedict 等は、日本の社会におけるこういう特徴を「タテの社会」や「位階関係」等の概念で表している。こういう傾向は韓国でも見られ、金なども指摘しているように、韓国の集団の中での位階意識は非常に強いといえる。ただ、前述のように、日本では権威をもつ人（服従の対象でもある）は社会集団の指導者であり、韓国では家族の中の親に最大の権威が与えられていることが、日本と韓国との差といえよう。

5. 日本と韓国における言語表現

最後に、日本と韓国における、自己主張そのものともいえる言語表現について簡単に調べてみることにする。

前述の、アメリカの自己主張に関する研究でも明らかになったように、一般的に西洋人に比べ東洋人の方が言語的表現（自己主張）が少ないとの指摘は、もっともの様に思う。しかし、日本と韓国とでは、言語表現の在り方が微妙に違うようである。西洋に比べると、両国とも「察しのよい」関係を保つためにも、自発的な表現を抑制することに価値が置かれる。しかし、コミュニケーションの在り方について日本と韓国のみを比較した場合、日本の方がより「意味の把握」を大事にし、韓国の方がより「意味の伝達」を大事にしている（金、『日本人と韓国人』）ようである。言語的表現の習慣に乏しいといわれる両国の間にも、このような微妙な相違が存在するということはとても興味深い。

II. 目 的

以上で述べたように、自己主張はその社会の価値観・集団の意味・対人関係等、様々な側面を反映する。そこで、本調査では日本と韓国の自己主張の在り方（対象別・内容別）を調べることによって、これらの諸側面について考えることを目的とする。

III. 方 法

1. 被 検 者

日本の大学生 210 人（男 112 人，女 98 人）と，韓国の大学生 194 人（男 88 人，女 106 人）。年齢は，日本が 18～22 才，韓国が 18～24 才。

2. 調査法（質問紙と実施要領）

Galassi (Galassi and Others, 1974, 1975) らによって作成された，College Self-Expression Scale (CSES) を基に，筆者が抽出した 14 項目が尺度として使用された。14 項目には，その内容によって，感情と信念（考え）を表す 7 項目ずつが含まれており，相手に対するネガティブな感情とポジティブな感情を内容とする 3 項目ずつが含まれている。各項目について，先生・親・友達の種類の異なる対象に対して，それぞれ回答が求められた。各回答については 1～5 点までの得点が与えられ，その合計点を「自己主張度」とした。合計点が高いほど，自己主張の傾向が高いことになる。

調査は，1988 年の 9 月から 10 月にかけて，日本と韓国で行なわれた。

IV. 結 果

1. 自己主張の全般的傾向について

調査の結果を基に分散分析 (ANOVA) を行なった結果が，表 1 と表 2 の通りである。

まず，日本と韓国とを全体の自己主張得点（表 1）で比較してみると，友達を除く親と先生に対して，日本の方が韓国の方より有意に高い自己主張の傾向を示している。その反面，友達に対しては，有意差は見られないものの，韓国の方が日本の方より高い自己主張の傾向を示している。この結果は，問題のところで考えられたこと（集団における調和の価値が，日本の方で高いと考えられた）とは反対の結果といえよう。

一方，男女比較（表 2）の場合をみると，まず，日本の場合は女子の方が男子より高い傾向を示し，親に対して最もその傾向が著しい。しかし，韓国では男子の方が女子より高い傾向を示すという逆の傾向が見られ，友達に対して最もその傾向が著しい。男女比較で興味深いのは，日本では女子が，韓国では男子がより自己主張の傾向が高いという逆転した結果を示すことである。

2. 対象別の自己主張について

調査の結果を基に，対象別・内容別による比較のために分散分析を行なった（表は省略。表 1

表1 自己主張の日・韓比較(得点の平均と日韓差の分散分析)

(F: 感情, T: 考えや信念, PF: 肯定的感情, NF: 否定的感情)

1) 親に対して

内 容	日 本 N=210		韓 国 N=194		検 定 結 果	
	平 均/標準偏差		平 均/標準偏差		F	P
PF	11.362	2.19	10.863	2.50	3.69	P<.10
NF	11.833	2.74	9.004	2.73	104.30	P<.01
F	27.194	4.35	23.427	4.55	68.31	P<.01
T	28.177	4.81	25.474	4.18	35.64	P<.01
TOT.	55.373	8.13	48.904	7.60	65.21	P<.01

2) 先生に対して

内 容	日 本 N=210		韓 国 N=194		検 定 結 果	
	平 均/標準偏差		平 均/標準偏差		F	P
PF	10.226	2.15	10.433	2.02	1.24	NS
NF	8.444	2.68	7.089	2.28	31.43	P<.01
F	21.381	4.14	19.901	3.55	15.22	P<.01
T	22.931	4.40	21.773	4.59	8.11	P<.01
TOT.	44.313	7.55	41.669	6.81	15.05	P<.01

3) 友達に対して

内 容	日 本 N=210		韓 国 N=194		検 定 結 果	
	平 均/標準偏差		平 均/標準偏差		F	P
PF	12.83	1.60	12.56	1.69	1.89	NS
NF	9.48	2.59	9.24	2.46	1.66	NS
F	26.09	3.83	25.58	3.61	2.17	NS
T	12.27	4.62	27.82	3.68	6.62	P<.05
TOT.	52.37	7.69	52.99	6.16	0.59	NS

と表2を参考)。その結果からも解るように、日本と韓国は、自己主張においてそれぞれ異なった傾向を示している。まず、日本の方では親に対する自己主張が、最も高い傾向を示し、次が友達で、先生に対しては最も低い傾向を示している (PFを除くすべての内容で)。一方、韓国の方は、友達に対して最も高い傾向を示し、その次が親に対してで、先生に対しては最も低い傾向を示している (男女と男子ではすべての内容で、女子ではNFを除くすべての内容で)。ここで興味深いことは、日本の大学生は親に対して最も高い自己主張の傾向を示し、韓国の大学生は友達に対して最も高い傾向を示すことである。そして、両方共に先生に対して最も低い傾向を示すということも注目すべき事であろう。そして、対象による自己主張の傾向には、有意な男女差は見られなかった

先生に対して自己主張の傾向が低いという結果は、問題のところでも指摘された権威のことを思うと、納得のいくものといえるが、日本の場合、親に対する自己主張が最も高いという事は意外な結果といえよう。

3. 内容による自己主張について

肯定的内容と否定的内容による自己主張の傾向を調べるために、肯定的内容と否定的内容にお

禹：自己主張について

表2-1 日本人大学生の男女比較（得点の平均，標準偏差，男女差のt検定）

(F: 感情, T: 考えや信念, PF: 肯定的感情, NF: 否定的感情)

1) 親に対して

内 容	男 平 均／標準偏差 N=112	女 平 均／標準偏差 N=98	検 定 結 果 t P
PF	10.57 / 2.34	12.15 / 2.03	5.25 P<.01
NF	11.68 / 2.53	11.98 / 2.95	0.76 ns
F	26.05 / 4.31	28.34 / 4.38	3.80 P<.01
T	27.51 / 4.96	28.85 / 4.65	2.02 P<.05
TOT.	53.56 / 8.31	57.18 / 7.95	3.23 P<.01

2) 先生に対して

内 容	男 平 均／標準偏差 N=112	女 平 均／標準偏差 N=98	検 定 結 果 t P
PF	9.69 / 2.33	10.77 / 1.97	3.63 P<.01
NF	8.71 / 2.78	8.18 / 2.57	-1.41 ns
F	21.10 / 4.30	21.66 / 3.98	.99 ns
T	23.03 / 4.45	22.84 / 4.35	-.31 ns
TOT.	44.12 / 7.55	44.50 / 7.54	.36 ns

3) 友達に対して

内 容	男 平 均／標準偏差 N=112	女 平 均／標準偏差 N=98	検 定 結 果 t P
PF	12.20 / 1.94	13.48 / 1.25	5.77 P<.01
NF	9.85 / 2.67	9.11 / 2.50	-2.06 P<.05
F	25.71 / 4.30	26.48 / 3.36	1.45 ns
T	25.74 / 5.31	26.81 / 3.93	1.66 ns
TOT.	51.46 / 8.81	53.29 / 6.56	1.72 ns

ける上・下30% ずつの GP 分析を行なった（結果の図表は省略）。その結果，日本の方（男女全体・男子・女子）と韓国の方（男女全体・男子・女子）のすべてのグループにおいて，ほとんどの対象に対して（親と先生そして友達に対する一部において），同じ傾向が得られた。即ち，肯定的内容の上位得点と否定的内容の下位得点に高い分布を示し，その反面，肯定的内容の下位得点と否定的内容の上位得点には非常に低い分布（その内，半分为0）を示しているのである。ただ，例外といえることは，友達に対する否定的内容の自己主張のみで，（いずれのグループにおいても）上位得点よりは下位得点に高い分布を示すということである。

どの相手に対しても，否定的内容の表現が少なく，肯定的内容の表現がより多いということは，問題のところで指摘された調和や「察しのよい関係」からも予想できることであつた。しかし，自分の気持ちを表すために，相手の気持ちを害したり，相手を脅かすことのないようにすることは，対人関係において基本的なことであろうし，また，それが正常の自己主張であることを思うと，この結果は日本や韓国のみでなく，すべての文化に共通して見られることかもしれない。

次に，考え（信念・思考）の表現と感情の表現とでは，どのような傾向を示すのかを調べるために，両側面における上位得点と下位得点の30% ずつの GP 分析を行なった（結果の図表は省略）。その結果，すべてのグループにおいて（すべての対象に対して），両側面共に上位の得点群

表2-2 韓国人大学生の男女比較（得点の平均，標準偏差，男女差のt検定）

（F：感情，T：考えや信念，PF：肯定的感情，NF：否定的感情）

1) 親に対して

内容	男 平均／標準偏差 N=88	女 平均／標準偏差 N=106	検定結果 t	結果 P
PF	10.90 / 2.58	10.83 / 2.42	-.19	ns
NF	8.61 / 2.59	9.40 / 2.86	2.10	P<.05
F	23.13 / 4.44	23.74 / 4.65	.93	ns
T	25.81 / 4.14	25.14 / 4.22	-1.11	ns
TOT.	48.93 / 7.36	48.88 / 7.83	-.05	ns

2) 先生に対して

内容	男 平均／標準偏差 N=88	女 平均／標準偏差 N=106	検定結果 t	結果 P
PF	10.56 / 2.01	10.31 / 2.02	-.85	ns
NF	7.33 / 2.33	6.85 / 2.23	-1.45	ns
F	20.39 / 3.50	19.42 / 3.59	-1.90	ns
T	22.89 / 4.69	20.65 / 4.49	-3.37	P<.01
TOT.	43.27 / 6.91	40.67 / 6.70	-3.26	P<.01

3) 友達に対して

内容	男 平均／標準偏差 N=88	女 平均／標準偏差 N=106	検定結果 t	結果 P
PF	12.50 / 1.81	12.62 / 1.56	.05	ns
NF	9.86 / 2.52	8.61 / 2.40	-3.52	P<.01
F	26.17 / 3.97	24.98 / 3.25	-2.25	P<.05
T	28.27 / 3.42	26.55 / 3.93	-3.27	P<.01
TOT.	54.44 / 6.10	51.53 / 6.22	-3.28	P<.01

と、両側面共に下位の得点群に高い分布が示された。自己主張は、内容によって傾向が異なるとはいいいにくく、その個人の表現の傾向によるものようである。最後にもう一つ注目しておきたいことは、韓国の方が日本の方より両者間（考えと感情）の差が大きく、考えの方でより高い自己主張傾向が見られたことである。（表1参考）

V. 考 察

1. 自己主張の全般的傾向について

まず、日本と韓国を全体的に比較してみると、全般的に日本の方がより高い自己主張の傾向を示している（友達に対してを除く）。問題のところで見てきたように、韓国より日本の方が集団の中での調和を大事にするということとは相反する結果といえよう。この結果から考えられることは、現在の日本における価値観の変化である。河合は、日本におけるこのような変化について、日本社会への「父性原理の浸透」と表現している。また、彼は日本への父性原理の浸透は、特に若い人々の間で著しく、年配者の間では母性原理が好かれていると指摘している。この結果のみで、日本の若者たちが、集団の調和より自分の権利や意志・感情などを大事にしているとはいいい

きれないかもしれないが、若者たちの間でははっきりした自己主張が現われたことから、日本社会の中での価値観が変化しつつあることが分かる。ここでもう一つ注目すべきことは、特に親と先生に対する自己主張の傾向が高いことである。従って、今回の調査の結果は、日本の若い人々の間での対人関係の在り方の変化は、特に、従来の権威に対する意識の変化が最大の原因であるといえよう。

一方、韓国の方で予想と相反する結果が得られたのは、日本と比較した場合なのであって、この結果のみで従来考えられたことと相反する結果とはいえない。この結果は、上述の通り日本の変化によるものといった方が妥当かもしれない。或いは、韓国の方でもこういった変化は考えられるが、ただ日本の変化に比べ、さほど激しい変化でないといえるかもしれない。そして、このような両国間の差は、主に親と先生に対するものであることに注目しなければならない。即ち、韓国では依然、「目上の人」に対する権威が強く対人関係に影響を及ぼしているといえよう。実際、友達に対する自己主張は、韓国の方がより高い傾向を示しているのである（有意なほどではないが）。

結論的にいえば、この結果から考えられることは、日本における対人関係（或いは権威に対する価値観）の変化と、韓国の対人関係における強い権威の存在の2点である。

次に、男女比較による自己主張の在り方について考えてみることにしたい。まず、日本においては、女性の方が一般的に男性より高い自己主張の傾向を示している。この結果は意外なものである。しかし、最も男女差が大きいのは、親に対しての自己主張と肯定的内容の自己主張であるという結果は、納得のいくものである。というのは、相手に対して善意・好意を表すことは、男性よりも女性に求められることであり、このことは、女性イメージに適した行動様式のように思われる。そして、家族の中での女性の自己主張が高いということも、日本人だからこそ納得できることである。というのは、伝統的に男性の権威が絶対的とされてきた日本といっても、強い母親の存在からも分かるように、実際は、家の中で実質的な側面の発言権は、影の存在である女性にあったことを表していることのようにも思われるからである。或いは、現在の日本の女権の伸張という現象を表すものかもしれない。

一方、韓国では、一般的に男性の方がより高い自己主張の傾向を示している。特に、友達と先生に対して、そして考えの内容で、この傾向は著しい。これは、韓国社会の伝統的な男性優位という現象を反映したもののようと思われる。もし、日本における女性の自己主張の高さが女権の伸張という社会的変化を反映したものとすれば、韓国においてはそういった変化は見られないといえるかもしれない。そして、特に男性における考えの自己主張が高いことは、男性イメージを反映するもののように思われる。即ち、自分の信念や意見をはっきりさせるということは、女性よりも男性に要求される属性のように思われるからである。

2. 対象による自己主張について

親・先生・友達の3つの異なった対象に対する自己主張の在り方は、日本と韓国それぞれが独特な様子を示すという結果が得られた。即ち、日本では、親—友達—先生の順に自己主張が高い傾向を示し、韓国では、友達—親—先生の順に自己主張が高い傾向を示したのである。

この結果から考えられることは、まず、日本では、家族の中での親の権威（或いは、家族の中

での調和に対する観念といえるかもしれない)の弱さが目立つということである。このことについては、2つの説明ができるだろう。まず、問題のところで指摘されたように、伝統的な日本の家族の弱さである。日本は、儒教の影響により「孝」が非常に強調されてきたが、日本人にとって本当の意味で服従の対象となるのは、親ではなく社会集団の指導者である、という指摘通りの結果かもしれない。もう一つ考えられることは、日本社会における価値観の変化である。上にも述べたとおり、日本の社会で行なわれつつある(すでに行なわれたことかもしれない)意識の変化(意識における西欧化、或いは、父性の浸透)が、集団における調和に変化をもたらしたのかもしれない。しかし、この結果を見るかぎり、そういう変化はまだ家族のなかに限るもののようにも思われる。調和(母性)の変化は、家族のなかの親子関係には影響を及ぼしているものの、家族外の集団にまで一般化してはならず、相対的に先生や友達に対しては、依然自己主張をするのに難しさを感じているといえるかもしれない。

一方、韓国では、親に対してより友達に対する自己主張が高い傾向を示す結果が得られた。このことは、日本と反対の結果(先生に対しては、日本と同じく、最も低い傾向を示すが)であり、興味深い。日本の方では、予想に反する結果であったが、韓国ではある意味で予想した通りの結果が得られたといえよう。即ち、韓国では、伝統的な親の権威が依然強く親子関係を支配していることをよく表す結果と思われる。

最後に、両国共に、先生に対する自己主張が最も低い傾向を示したことは、両国において先生の持つ意味の独特性にも起因するよう思われる。伝統的に学生にとって家族外での代表的権威人物といえる先生は、職場の上司や他の集団の指導者とは違って、絶対的尊敬の対象として考えられてきた。両国社会の価値観の変化は、まだ、家族の外の対人関係にまで決定的影響を及ぼすには至っていないといえるかもしれない。

3. 内容による自己主張について

日本と韓国ともに、肯定的内容の方が否定的内容の方より表現しやすい傾向があるという結果が得られた。この結果を、両国における調和という概念で説明することもできると思うが、ある意味では、すべての文化で共通して見られることかもしれない。むしろ、ここで注目すべき事実は、親に対して最も否定的内容の自己主張をしやすいということであろう。このことは、家族の機能や役割に関する従来の考え方と一致するものといえよう。家族とはその成員に情緒的安定感を与え、外部からの圧力や緊張から成員を守る役割を持つといえる。従って、家族には否定的なこともより安心して表現することができるのだろう。

次に、両国共、考え(信念や思考)の方が感情より高い自己主張の傾向を見せることについて考えてみよう。このことは、両国における特殊な価値観によるもの(感情の表現を抑制することに高い価値観が与えられる)とも理解できるだろう。しかし、これは、ある文化の特殊な特徴とはいえないかも知れず、むしろ、成熟度と関わることもかもしれない。即ち、感情を抑制し、信念や考えを表現することが、人間の適応や成熟とも関係の深いことと思われるのである。

VI. お わ り に

本調査で、自己主張について考えてみた。そして、結果として、日本と韓国における独特な対人関係の在りや、その社会における特殊な価値観などを見いだすことができ、また、その原因についても筆者なりに考えてみた。

ここでの自己主張は、非攻撃的で、相手の存在を脅かさないことが前提とされる。しかし、個人の内的なものを表現することに対する抵抗の他に、表現自体が相手に対する攻撃的行為として考えられているかも知れない。こういうことから、自己主張という概念の設定の難しさと大事さが考えられる。従って、自己主張を測る方法においても、もっと工夫が要求されると思われ、今後の課題として考えていきたい。

西洋においては、適応の一つの条件でもある自己主張が、東洋の文化でも、必ずしも同じ役割を有するともいいがたいだろう。東洋における自己主張の意味についても、一層の研究が要求されると思われる。そして、この目的のためには、西洋文化の人々をも含む、比較研究が必要だろう。また、自己主張を通して対人関係について考えるためには、家族内・外より幅広い対象についての研究と、年令的にもより幅広い被検者集団に対する研究が必要とされ、こうした被検者の問題も今後の研究の課題として考えていきたい。

参 考 文 献

- 我妻洋ら（訳）『ホーナイ全集』第2, 5巻 誠信書房 1973, 1981
鄭漢澤『韓国人』, 博英社 1979
Deluty, R. H. "Children's Action Tendency Scale", *Journal of Counseling and Clinical Psychology*, Vol. 47, pp. 1061 - 1071, 1979
Fukuyama, M. A. "Dimension of Assertiveness In An Asian-American Student Population", *Journal of Counseling Psychology*, Vol. 30, pp. 429 - 432, 1983
Galassi, J. P. "Validity of a Measure of Assertiveness", *Journal of Consulting Psychology*, Vol. 21, pp. 248 - 250, 1974
Galassi, J. P. "The College Self-Expression Scale", *Behavior Therapy*, Vol. 5 - 2, pp. 165 - 171, 1975
河合隼雄『母性社会日本の病理』, 中央公論社, 1976
河合隼雄『家族関係を考える』, 講談社現代新書, 1980
金容雲『日本人と韓国人』, プリギブナム社, 1981
金容雲『韓・日民族の原型』, 平民社, 1987
李御寧『縮小指向の日本人』, ギリン院, 1986
中根千枝『適応の条件』, 講談社, 1972
作田啓一『恥の文化再考』, 筑摩書房, 1967
Sue, D. W. "Differential Characteristics of Japanese American and Chinese American College Students", *Journal of Counseling Psychology*, Vol. 20, pp. 142 - 148, 1973
ユン泰林『韓国人』, 玄岩社, 1970

(博士後期課程)